

第6回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「思い出の思い出は風の庭」

香川県 県立三木高等学校 2年 黒田 佳奈



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

優秀賞／銀の星賞

香川県 県立三木高等学校 二年 黒田 佳奈

『思い出の思い出は風の庭』

「銀杏の花言葉って知ってる？」

「花言葉？ 木なのに花言葉があるの？」

「そうよ。銀杏の花言葉はね…」

お婆ちゃんは木漏れ日の中でも綺麗に見えた。

「まだ起きてなかったの。早く準備しなさい。今日は忙しいんだから、ゆっくりできないのよ」

そう言って真っ黒い服に身を包んだ母さんはパタパタとスリッパの音をさせて行ってしまった。香水の臭いが鼻に残った。時計を見ると午前七時すぎ。まだ時間は三時間もある。

その日はお婆ちゃんの三回忌だった。大好きだったお婆ちゃんが亡くなって三年になるんだと思ってまた気が重くなった。時間が経ってどんどん私の中から消えていく面影。私の頭を撫でてくれたあの優しさだけが胸の中に残っている。法事が無くなるわけではないけれど、私はゆつくりとベッドから起きあがった。涼しくてむかつくほど気持ちよかった。

お婆ちゃんの家は私の家の隣にあって、親戚や近所の人の黒い集団ができていた。この家は独りで住むには大きすぎると思う。私の両親は共働きだったので、小さな私の世界は学校とこの大きな家だけで十分だった。

古びた玄関をくぐった。お婆ちゃんがいた頃の染みついた線香の匂いは香水や化粧品の臭いで薄まっていた。もうここにもお婆ちゃんはいなかつ

た。

しばらくしてお坊さんが来て読経が始まった。母さん達女性陣は台所でお茶の準備をしていていなかった。私の周りはおじさん達でいっぱいだった。その声は腹に響くように低くて子供には到底出せない音だ。低い声の波の中で私に頼るものは何もなかった。今日もお経が始まって高いのは私の声だけだった。不安になって、周りを見ると面倒そうに胡坐あぐらを組んでいるのが目に入った。部屋をうすく満たしている線香の匂いに混じって煙草たばこの煙が鼻にかかった。お婆ちゃんは煙草が苦手だったのに。みんな知っているはずなのに。私の声一つだけピントがずれている気がした。低い声が部屋を満たして右からも左からも上からも私を押しつぶそうとする。名前の分からない感情がグツと湧いてきた。堪えるために下を向いた私の背中を近くにいたおじさんが大きな手でさすってくれた。でもそれが更に私を動揺させた。もうこの手は私と同じ気持ちじゃない。そう思った瞬間、私はその手を振り払って逃げるように部屋を飛び出していた。

「どうしよう…」

溜息のように呟いて背後の銀杏にもたれ掛かった。後ろに大きな存在を感じて少し安心した。この銀杏はお婆ちゃんの家の裏にあって、遠くから見てもグンと飛び出して見えるほど大きい。足下に広がった円形の陰が少し離れた所まで広がっていた。風が吹いて陰がグニヤリと形を変えた。しばらく静かな庭でぼんやりと風と陰と音を感じた。銀杏が見守るこの庭をお婆ちゃんはよく手入れしていたし、いなくなった今でも少し荒れた感じはあるけれど草の一本一本までお婆ちゃんとの思い出が染み込んでいるように温かい。お婆ちゃんを思い出して小さく息を詰めた。例え一人になっても逃げ出すべきではなかったのに。耳を澄ませてもあの低い音は聞こえない。どうやら終わってしまったらしい。お婆ちゃんに申し訳ない。ゆつくり息を吐いたのと同時に包み込むような優しい風が吹いた。

ガサツと目の前の植木が揺れた。でも頭上の銀杏は静かだった。風ではないのだろう。植木を眺めているとニュツと灰色のネコが顔を出した。カチツとその満月のような目と視線があつた。逃げるかなと思つたけれどネコは気にせず風と同じ音をさせて植木から出てきた。そのまま私なんかいないようにスルスルと歩いて来て、私の隣、手を伸ばせば届きそうなくらい近くに腰を落ち着けた。しばらく時間が止まったようだった。チラリと目を向ければネコは私の事なんて気にもせずに堂々と寛いでいる。汚れているのか、それが地毛なのかネコは全身濃い灰色だった。決して若くない顔で、髭と目の上の毛だけが真っ白だった。でもあんまりにも静かでネコは完全に庭に馴染んでいた。寧ろ法事を飛び出してきた私の方が居心地が悪い。でもあの冷たい部屋には戻りたくない。途方に暮れて吐く息の全てが溜息になった。

「いいねお前は。辛い事なんてないんでしょ」

ネコは今まで通り私の言葉なんて気にもせずに聞き流してくれると思った。だからこそ私はこんな事が言えた。しかしネコは初めて私の方を見て反応した。

「そんなこと、ないわ」

しゃべった。口を小さく動かして、ネコがしゃべった。でもそれがあんまりにも自然で不思議と違和感がない。それでも私は驚いて自分の耳を疑つた。ネコは私の方を見ていて、まるで私の反応を伺っているようだった。どうしよう。どうすれば、いいんだろう。大声を出せば障子の向こうから大人達が駆けつけてくれるだろう。そして何よりこのネコは逃げて行くだろう。先ほどとは違ってネコは寛いではない。いつでも動けるように身体を緊張させていた。判断を私に任せてくれているようだ。

私は意を決して大きく息を吸い込んだ。ネコは体重を前に傾けた。

風が止まって、時間も止まったように感じた。私はそのまま息を吐き出

した。

「何があるの、辛い事って」

ネコがしゃべってから随分間があった気もするが実際はそうでもなかったのだろう。でも私はネコが言った。「そうでもないよ」という言葉を思い出すのと、それに対する返事を考えるのに少し時間がかかった。ネコはまた庭を眺めるように座り直した。

「忘れてしまうことが辛いわ」

「忘れる？ 何を忘れるの？」

「今まで何度も死んでいく友達を見てきたの。その子達を忘れて笑っている自分が居ることが辛い」

私もネコも眼を合わさなかった。ぼんやりと夏の近づいた庭を眺めながら話した。向かい合って話そうかなとも思ったけれどやっぱり奇妙な気持ちになってやめた。風が吹いて私の髪とネコの毛を揺らした。

それは今まで私を感じていたものと、きつと同じだと思った。例え隣にいるのがネコでも、力が抜けるように安心した。

「あなた、なんていう名前？」

「名前はないの。私たちは名前前で呼び合ったりしないのよ」

ネコは白い髭を揺らして答えた。

「そうなんだ…」

「同じ場所にいるけど、生きている世界が違うのよ。私が見ているこの庭と、あなたが見ているこの庭はきつと違うわ」

ネコはクスクス笑った。ネコの方に顔だけ向けると、ネコもこつちを見ていた。

人間とネコ。風が吹いた。風の音は木々のざわめきだ。命を揺らす音だ。きつとこの瞬間私たちの感じている世界は同じだっただろう。

「風だね」

「気持ちいいね」

そしてどちらともなく笑い出した。

「あなた最近元気になってくれて良かったわ」

土曜日の朝出勤前、化粧をきちんとした母さんがぼつりと言った。法事の後飛び出して行ったことは、後から聞いたのだろう。その後のことは何も言わなかった。

「楽しいことあったの？」

「うん、まあね」

「そう。ああ、もう時間だわ。片付けだけお願いね。行ってきます」

あの日以来ネコとは何度か会って話をした。よく話題に上がったのはお婆ちゃんのことだった。ネコはお婆ちゃんはよく撫なでてくれたと嬉うれしそうに話してくれた。ネコと会うのは決まって銀杏の下だった。あの場所ならネコが人間の言葉を話しても不思議ではない気がしていた。窓を開けると一段と緑を濃くした銀杏が隣の家からグンと伸びていた。今日も会えるかもしれない。

あの日「また、会えるかな」と言った私の言葉にネコは呟くように答えた。

「約束はしないでおきましょう。そうね…また風の吹く昼に」

そう言つてネコは植木の中へと消えていつてしまった。

私は午前中に宿題を終わらせて小さな水筒にミルクを入れて、もう使わなくなった小皿を持って家を出た。道に誰もいないのを確認してから、まるで泥棒のようにこっそりお婆ちゃんの家へと入った。奥へ進むと銀杏を中心とした庭が変わらずそこにあった。

「待った？」

「いいえ、そうでもないわ」

銀杏から返事があった。私は銀杏の真下へ行つて、その太い幹を見上げた。

光と陰でキラキラ揺れる葉の中にネコはいた。灰色の毛が今は銀と黒に揺れて神秘的だった。ネコは笑って結構な高さからヒラリと難なく飛び降りた。

「久しぶりね、元気にしてた？」

見とれている私にネコの方から声がかかった。

「うん、元気。そうだ、ちょっと待ってて」

私は家から持ってきた小皿にミルクを注いでネコの前に置いた。

「はい、どうぞ」

「いつも有り難う」

私はどういたしましてと答えて、余ったミルクをコップに入れて飲んだ。ネコは舌を使って器用に舐めた。本当にそんなので飲めているのかと思っただけれど、話している間に綺麗に無くなっていった。

「ごちそうさま」

ネコは空になったお皿に向かって丁寧に頭を下げた。そう言えばお婆ちゃんも手を合わせながら頭を下げていた。

「それ、お婆ちゃんもやってたよ。どうして頭を下げるの？」

ネコは少しだけ答えをと言うより言い方を考えて

「命を貰うから」

と、短く答えた。風が吹いてネコに降る木洩れ日が揺れた。ネコは一つの命としてそこにいた。

夕暮れが近づく気配で私たちは別れた。私は家へ、ネコは只ただのネコへと帰る。植木へと向かうネコの背に私は声を掛けようとした。

「また風の吹く昼に」と。次に会うための大切な約束だったから。するとネコは遮るように風の匂いをかいで私の方を振り返った。

「残念だけどしばらく会えそうにないわ。雨の季節が来るみたい」

「そうなの？」



「私たちはこう言うことに敏感だから」

ネコは苦笑すると、前足を舐めて顔をこすった。そうしていると本当にネコらしい。ネコは手の代わりに尻尾をヒヨンと振って植木の中へと入って行った。

猫が顔を洗うと雨が降る。昔からそう言われているのを証明するように次の日から雨が降り始めた。同時にTVが梅雨入りを告げた。しばらく週間天気予報に傘マークが並ぶだろう。日に日に洪水や土砂災害のニュースが増えて、学校でも警報時の対策を説明された。

それはTVの中だけの世界ではなくて通学路の途中にある大きな川は目に見えて増水していた。まるで日本にいることを忘れさせるように轟々と茶色に濁った水を海へ押し出していた。その水一滴にまで命が吹き込まれたように、激しい流れは大きな叫び声を上げていた。この中にネコが巻き込まれているのではなかと悪い予感が頭をよぎった。

雨は3週間後ピタリと止まった。梅雨明けがあまりにもいきなりだったので肩すかしを食らったような気がした。朝、窓から入ってくる光が久々に眩しくて、窓を開けると昨日までボタボタ泣いていた空から雲が一つも無くなっていった。本当の青だった。世界が空に飲み込まれるのではないかと思わせる、迫ってくるような空だった。夏になったんだ。目を閉じて耳を澄ませると、銀杏のざわめきと揺れる木洩れ日が瞼の裏でチカチカした。

七月半ば。学校では夏休みに向けて面談が行われていた。生徒は午前中で授業を切り上げて帰れるので梅雨明けと同時に学校内はウキウキした雰囲気包まれた。それは私も同じだった。やっと会える。今週末、庭に行ってみよう。梅雨の間の不安はいつの間にか期待へと変わっていた。

ネコは私が学校へ行っていることを理解していたので平日は庭には居な



い。だからその日は午前授業だったけれど帰らずに近所の図書館で夏休みの宿題と格闘することにした。図書室の中は静かで涼しかった。勉強にきた大学生と新聞を読むお爺さんで自習用の机はほぼ満席だった。幸いガラス戸が一番近い席が光に包まれてポツンと空いていた。図書室の裏側は外からでも入れる小さな広場になっていて、その席からは広場全体を見ることができた。誰もいないけれど淋しい感じはなかった。一面の芝生は空に向かってピンと伸びているし、何本か植わっている木は逆光で真っ黒に見えた。微かに聞こえるジーギーガンガンという蝉の声。芝生に半分埋もれるように土をつつくスズメ。夏を形にしたらきつとこんな感じだ。そこにある命の全てが空へと手を伸ばしているようだった。飽きることのない命の広場。眩しい日の光。私はしばらく見とれるように眺めていた。

ふと木の陰、私の視界の隅に黒い影が入ってきた。気になってよく見るとネコだった。お婆ちゃんの庭でしか見たことがなかった灰色のネコだった。自然に顔が弛むのを感じた。無事だったんだ。少し痩せていて、動きに合わせて肋骨が浮き出している。今度会う時は何か食べるものも持って行ってあげよう。きつと初めてミルクをあげた時みたいに鼻をヒクヒクさせて驚くだろう。それから…

私はふと違和感を覚えた。ネコの周りの空気がピンと張りつめていた。ネコは体制を低く、まるで芝生の陰のように動いた。『狩り』と言う単語が何処からか湧いてきた。認めたくなかった。けれどネコの視線は針のように一羽のスズメに突き刺さっていた。まるで映画を見ているように私の周りの世界が無くなった。もう蝉の声も聞こえない。時間が止まったのかと思った。風が吹いた。スズメの茶色の翼。芝生の緑。夏…

一瞬だった。灰色が動いて私の目は残像だけを映した。スズメがどうなっていたかなんて見えなかった。芝生の中に押しつけるネコの頭だけがスズメが足搔いているのを示した。私は動けなかった。すぐに広場に静寂が戻っ

てきた。広場は非道く暗い。ネコが顔を上げた。芝生から見える茶色の小さな羽根。もうあの翼が風を掴むことはない。

ネコはスズメを見下ろしていた。そして不意に眼を閉じて頭を下げた。私はハッと息を詰めた。頭の中に一つの情景が見えた。お婆ちゃんが食事をする時。ネコがミルクを飲んだ時。食べ物に向かって頭を下げていた。食べ物に向かって。

私は荷物を引っ掴んで図書館から逃げていた。ドタバタと煩い音がして周りの人の視線が飛んできた。五感で感じるべき情報が私の中に留まらずに流れていった。ただ私の中にあっただのは、ネコがこれからあのスズメを食べるという事実だけだった。

ガラス戸から目を逸らした最後の瞬間、ネコと目が合った。鋭いネコの視線が私を捉えてしまった。あの満月のような優しい瞳を私はとても好きだったのに…

何時間が過ぎただろう。一階で母さんが帰ってくる音がした。涙が知らない間に流れて頬がガビガビになっていた。窓から入る西日が眩しくて目を閉じた。眠ってしまいたい。そうすれば目が覚めた時、夢だったと思えるのに。でも目を閉じるとあの情景が頭の中を一杯にした。急いで目を開けて振り切るようにカーテンに手を伸ばした。

窓の向こうに灰色が見えた。夕日に紅く染まりながらネコは塀の上に静かに座っていた。逃げようかと思った。窓を閉めようとした時ネコの声が耳に届いた。久し振りに聞いた優しい声音。縋るように耳を傾けている自分がいた。

「生きている世界が、違うのよ」

ネコは淡々としていた。

「私は…」

「あなたが見たものと、私がしたこの意味は全然違うの」

「…そんなこと、分からないよ…」

ポロリと溢<sup>あふ</sup>れてきたものが私の唇から流れて形になった。

「分かるわけないわ。あなた、スズメを殺したのよ。命を奪ったのよ。一つの…大切な命なのよ」

「私はこうやって生きてきたの」

「スズメ一羽の命よ。どんな理由でもそんなこと…許されるわけない」

私は勢いに任せてカーテンを閉めた。声は届くのに姿が見えるのに、ネコとの距離は遙か遠い。

「お願い、最後に一つだけ聞いて」

ネコの声がカーテンの向こうから聞こえた。口調はいつもと変わらない穏やかさを帯びていた。私はずっとこの声を聞きたったのかもしれない。

「私はあなたに謝れない。これが私の世界だから。あなたが私を嫌いになるのは仕方のないことかもしれない。でも、もしいつか今日のことを思い出して、考え方が変わったのなら银杏の所へ来てね。お願いね…サヨナラ、今はあなたの世界で生きてね」

ネコが去っていく気配がした。私の中で何か音が立てて落ちてしまった。

優しい風に頬<sup>ほお</sup>を撫でられて顔を上げるとお婆ちゃんの家の前だった。秋になったこの家は茶色と赤と黄色の世界に埋まっている。あれ以来一度も入ってない。見上げる银杏は濃い緑を鮮やかな黄色に変えていた。風が吹いて银杏はガサガサと乾いた音を立てる。あれからネコはどうしただろう。今なら理由を聞いてあげられるかもしれない。風に任せて道を転がる落ち葉のように私はぼんやりとお婆ちゃんの家をくぐった。足は自然と庭へと向かう。思った通り誰も手入れしていない庭は一面草原のようになっていた。淋しい。時間はどんどんお婆ちゃんを連れて行ってしまおう。小さ

な虫たちが見知らぬ侵入者に驚いて逃げて行く。私は銀杏を目指す。途中何度も足や腕を草で切ってしまったけれど、少しも気にならない。銀杏の下は開けていた。

それは、苔の生えた太い幹の根元にいた。きっと何も知らない人が見たら気付かなかっただろう。いつだって穏やかで静かだったから。私は歩く。足に伝う血の感覚だけが鮮明だ。真っ赤な血。生きている証。

「やっと、会えたね」

灰色のネコは静かに、そこに横たわっている。死んでいた。紛れもない死がネコの上に降り立っている。命が尽きるべくして尽きていた。落とし物が見つかった。周りの世界が輝きだす。スズメが死んでしまった瞬間に見えるようになった私の周りの命。この庭も川も銀杏も私も生きている。お婆ちゃんもスズメもネコも一つの命だった。ネコと出会ってから見えるようになった、たくさんの命の輝き。私は膝を着いてネコを撫でる。初めてその身体に触ったことに気付く。サラサラとした手触り。少し強く触ると硬い身体に当たる。毛並みは温かいのにネコは硬くて冷たい。生きていた時はどんなに柔らかく温かかっただろう。お葬式のお婆ちゃんと重なった。最後に触れたお婆ちゃんの冷たい肌。

視界が歪んだ。泣きそうと思うのと灰色の毛に水滴が落ちるのは同時だった。ネコの灰色の毛並みに吸い込まれていく涙。止まらない。目の前で死んでいったスズメの命。目の前で死んでいるネコの命。何の違いもない。いつでも私は泣くことしかできない。猫はちゃんと分かっていた。「命を貰うから」と。私は非道いことを言ってしまった。

私はしばらく泣いた。今この胸の痛みをいつか忘れてしまう日が来るかもしれない。時間がお婆ちゃんの思い出を薄れさせていくように、気付けば今日のことを忘れて笑っているかもしれない。「忘れてしまうことが辛いわ」確かに、辛いね。私には砂時計の砂を止められないもの。でも私は



できるだけ覚えておくことにするよ。あなたと交わした大切な時間。この胸の痛みと共に。私も一つの命としてここにいるのだから。

庭に夕日が差した。銀杏の葉が燃えるような金色に光った。

「銀杏の花言葉は、鎮魂っていうんだよ」

私は頬に伝う涙をぬぐった。立ち上がるよ。あなたが教えてくれた命を精一杯生きるよ。だから、ごめんなさい。それから、ありがとう。

風が吹いて金色の扇がネコの上に一枚落ちてきた。

「それじゃあ、また、風の吹く昼に」